

苫小牧市総合教育会議議事録

会 議 名	令和５年度 第１回 苫小牧市総合教育会議
日 時	令和６年３月２２日 自 １３時００分 至 １４時０５分
場 所	市役所本庁舎５階第２応接室
出 席 者	市 長 岩 倉 博 文 教 育 長 福 原 功 教 育 委 員 佐 藤 郁 子 教 育 委 員 齋 藤 智 子 教 育 委 員 岡 田 秀 樹 教 育 委 員 高 橋 憲 司
欠 席 者	
事 務 局	教 育 部 長 園 田 透 教 育 部 次 長 斎 藤 貴 志 教 育 部 参 事 東 峰 秀 樹 教 育 部 参 事 桑 島 久 典 学 校 教 育 課 長 江 原 倫 代 学 校 教 育 課 教 職 員 係 長 伊 藤 理 絵 学 校 教 育 課 教 職 員 係 主 事 滝 沢 拓 也 総 務 企 画 課 長 下 濱 辰 哉 総 務 企 画 課 長 補 佐 猿 田 秀 一 総 務 企 画 課 主 査 安 藤 龍 慧 総 務 企 画 課 主 任 主 事 松 中 あ や 子 総 務 企 画 課 主 事 根 田 笑 里 総 合 政 策 部 政 策 推 進 室 長 茶 谷 英 史 総 合 政 策 部 政 策 推 進 課 長 大 宮 良 総 合 政 策 部 国 民 ス ポ ー ツ 大 会 準 備 室 長 神 保 英 士 総 合 政 策 部 ス ポ ー ツ 都 市 推 進 課 長 畠 山 邦 雄
協 議 事 項	(１) 勇払地区の小・中学校の今後の在り方(案)について (２) とまこまい型部活動地域移行ビジョン(案)について
会 議 の 経 過 概 要	別紙のとおり

1 開会の宣言 ・ ・ ・ 1 4 時 0 0 分
(岩倉市長) それでは、令和 5 年度第 1 回苫小牧市総合教育会議を開催させていただきます。まだ完全に回復をしていないので、ご挨拶も座ったまま、ご無礼をしております。一日も早く完全回復に向けて努力をしていきたいと思ひます。本日の議題は 2 件でございますが、いずれも今後の方向性を示す重要な案件であります。第 5 回市議会定例会でも質疑の対象となった案件でありますので、今日、しっかりとご意見をいただき、次年度の準備を進めていきたいと思ひておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。
2 協議事項
(1) 勇払地区の小・中学校の今後の在り方(案)について
(岩倉市長) 「勇払地区の小・中学校の今後の在り方(案)について」事務局から説明をお願いします。
(教育部斎藤次長) それでは、議題(1)「勇払地区の小・中学校の今後の在り方(案)について」を説明いたします。資料は A 4 横の資料をご覧ください。資料 2 ページをご覧ください。本市の学校規模適正化基本方針では、勇払地区については、立地や地域性において、当面、検証の対象としておりませんでした。が、児童・生徒の減少が続き、小学校では複式学級となり、望ましい教育環境の維持が難しくなっている現状を踏まえ、今年度から勇払地区の学校の今後の在り方について検討協議を開始したところであります。3 ページ勇払地区の歴史と現状ですが、苫小牧発祥の地であり、地域住民の精力的な取り組みにより、八王子千人隊踊りや御会所太鼓といった郷土芸能が現在まで継承されているなど、長い歴史や伝統、郷土愛にあふれる地区となっております。また、市内で初めてコミュニティ・スクールを導入し、藍染め体験など、地域とともに特色のある学校運営がなされています。また、今年度、環境省の

脱炭素先行地域に選定され、本市のゼロカーボン・シティへの挑戦において、重要な
役割を担う地区でもございます。次に、児童・生徒数になりますが、令和５年度５月
１日時点で、勇払小学校は６０人、勇払中学校は４３人となっており、住民基本台帳
による人口推計から、６年後の令和１１年度には、勇払小学校が４１人、勇払中学校
が３０人となり、児童・生徒数の減少が更に進む見込みとなっております。下にある
学校施設につきましては、小学校・中学校ともに、老朽化対策が必要であり、苫小牧
市小中学校施設整備計画においては、令和９年度から１０年度頃に、勇払小学校の大
規模改修を予定していることから、この時期を目途に将来の学校の在り方を示す必要
があると考えております。続いて４ページをご覧ください。地域住民及び小中学校保
護者との協議検討の経過について簡単に説明をさせていただきます。昨年７月の勇払
地区学校運営協議会で、学校の現状と今後の在り方について説明をし、地域の方々と
協議を開始しました。１１月には、今年度義務教育学校として開校した植苗小中学校
へ、学校運営協議会の方々を対象とした視察を実施しております。本年１月２４日に
は、勇払地区住民を対象とした住民説明会を実施し、さらに、２月７日には勇払小学
校の保護者へ説明会を実施するとともに、２月１５日から２９日まで新年度に入学す
るお子さんがいる保護者を含めた保護者のアンケート調査を実施しています。これま
で寄せられたご意見についてですが、地域の方からは、勇払は苫小牧発祥の地であり、
郷土芸能の伝承を学校とともに取り組まれていること、また、地域そのものの衰退に
つながるといった懸念もあり、義務教育学校への移行を含め、学校を残して欲しいと
いうご意見がほとんどでございます。保護者からは同様に、勇払での学校存続を望む
意見が多いものの、小規模学校での学習活動や人間関係などに不安がある、沼ノ端地
区との統合を望む声も一定数ございました。資料５ページをご覧ください。勇払地区
の今後の在り方についてでございます。これまでの保護者や地域の方からの意見を踏
まえて検討してまいりましたが、学校存続の声が多いことをふまえて、より多くの教
職員が児童・生徒にかかわり、９年間を通して一貫教育が可能であることや、早い段
階から教科担任制を導入することにより、専門的で効果的な授業のほか、複式学級の

授業の改善、成長に応じたきめ細かな指導が見込めることなどから、義務教育学校への移行を目指すこととしたいと思います。義務教育学校へ移行するにあたっては、一部の保護者から小規模校に対する不安もあることから、そのデメリットを解消するための指導方法や地域との連携協働の充実など、新たな学校経営のビジョンを示していくことが必要となります。また、施設面においては、ゼロカーボンの観点や避難所機能を有していることなどから、関係部署としっかりと調整をしていきたいと考えております。資料6ページをご覧ください。最後になりますが、義務教育学校への移行までの流れについてです。この会議にて、方向性を確認いただいた後、令和6年度には保護者や地域住民からの意見を伺いながら、市の関連部署と協議調整を行い、具体的な計画となる勇払地域プランを策定したいと考えております。以上、勇払地区の小・中学校の今後の在り方について説明を終わらせていただきます。
(岩倉市長) ただいま事務局から案の説明がございましたが、この案について、ご意見あるいはご質問を伺いたしたいと思います。最初に、佐藤委員からお願いします。
(佐藤委員) ただいま事務局のご説明にもありましたとおり、地域性を生かした教育内容ですので、今後さらに長所と短所が見えてくるのではないかと思います。特に、人数が少ない環境の中で勉強をしておりますと、進学の際に、自分の進むべき道というものを選ぶときに、迷いだったり、様々な情報だったりによって、今のところではないとことで勉強をしたいという気持ちになることも考えられるかと思います。競争しない世界というのは理想ではありますが、今、世界的に見ても競争をしていく世界、スポーツでも文化でもそうですが、その世界の中で自分の力がどの程度、どのあたりなのか確信をしたいというのは、いつのどのような年齢の小学生でも中学生でもあろうかと思います。自分の力を知るという意味では、視野を広げて、自分の人生の、大げさに言いますと、自分の人生に関わる時期になろうかと思いますので、様々な意見が出てくることが予想されます。ご父兄の方々も含めて、多様な意見、要望に関して、変化を恐れず、進めていかなければいけないと思います。
(岩倉市長) ありがとうございます。齋藤委員お願いします。

(齋藤委員) 私も何度か勇払地区の学校にお邪魔させていただいたことがあります。
複式学級の授業も拝見させていただいたのですが、先生もとても工夫をして授業を行
っていましたが、やはり、なかなか厳しいところもあるなど、個人的には感じました。
実際、そういうクラスを見たこともあって、今回のこの案は、妥当という言葉が正し
いかは分かりませんが、一番、義務教育学校への移行が現実的かと思います。勇払地
区の場合は、子供の数が少なくなってきたから、ただ単純にどこか違う学校と統合す
るというものではなく、先ほどのお話にもありましたが、苫小牧市がスタートした地
区ということで、地域の独特な伝統芸能の継承も大事になりますし、義務教育学校に
移行していくことがいいのかと思います。ただ、先ほどの保護者の方の声で、人数が
少ない学校生活のなかで人間関係を学ぶことがなかなか難しいのではないかという不
安の声があります。私もそこが気がかりです。子供は子供同士触れ合うことで成長し
ますから、子供同士の多くの触れ合いがある方が子供たちにとっては、プラスである
ことも多いと思います。ただ、私たちは、コロナ禍の３年間で、直接、触れ合えなく
ても、逆に苫小牧の勇払以外の子供達にも勇払の伝統芸能や活動を知っていただく機
会を持って、その中で他校の子供達とも多く交流ができる場を設けられたらいいかな
と思います。それがまた勇払地区の子供達にとっても、他の地区の子供達との触れ合
う機会を持つことによって、心身ともに成長できる場を持つことができればいいかと
思います。漠然とですが思いました。以上です。
(岩倉市長) ありがとうございます。岡田委員、お願いします。
(岡田委員) 学校というのは、地域に支えられて運営されていくものです。地域の
皆さんがどのようにお考えかということも、考えていかなければならないのかと思ひ
ます。勇払の今までの地域性ということからみますと、学校は、勇払という地域で、
地域の皆さんに支えられていくのがいいのかと思います。やはり今後の生徒数の推移
を考えますと、減少傾向ということもあります。その意味で小中一貫の義務教育学校
への移行を考えていくのも方法かと思います。また、勇払の地域性ということで、市
の今後のビジョンを考えますと、ゼロカーボン、工場が近くにあるということを考え

ますと、新たな発想に基づく文化圏を作れる、作っていただけるのではないかと思います。
そういった小中一貫の義務教育学校を基礎にして、地域を作り上げるというのも方法
かだと思います。
(岩倉市長) ありがとうございます。高橋委員お願いします。
(高橋委員) まずは苫小牧地域における小規模校、小さい学校、人数が少ない学校、
というところでは、コミュニティ・スクールの取り組みをされていた先験的な学校の
一つになります。全体的なお話をさせていただきますと、日本の将来人口も50年後
には三分の一に減ってしまう、8,000万人台になってしまう。苫小牧市も間違い
なく人口減少が進む中で、どのくらいのスパンで学校のことをケアしていくのかとい
うことを考えていくべきということも一つにあります。学校自体は、最終的には、先
ほども言ったとおり、子供的人数がどのように推移するのかによって、適正化
を図るのでしょうか、地域の人々の納得感といいますか、どのように丁寧に説明をしな
がら、最終的には統廃合をしたり、学校自体を無くしてしまうということにつながっ
ていくかと思いますが、その期間のケアを、今からできることを踏まえて一つずつ
お話を進めてやっていくしかないのかと私は思っております。
(岩倉市長) ありがとうございます。それでは、教育長お願いします。
(福原教育長) まず、今後の在り方について、事務局から説明がありました義務教
育学校への移行につきましては、基本的に私も同じ意見でございます。勇払という地
域性を除いて考えた時に、人口減少、少子化の進行などから、また施設の老朽化、教
員不足ということ考えたときに、将来的な先を見据えた学校の統廃合は、私も必然
かと考えています。一方で、勇払地区は、本市の起点でもあり、八王子千人同心を大
切に思う地域の方々による活動、郷土芸能の継承に、勇払の小中学校は大きな役割を
果たしているところでございます。また、説明にもありましたが、ゼロカーボンの取
り組みですとか、今、千歳にラピダスが進出する関係で、様々な関連企業の進出が期
待され、雇用機会の拡大を考えた時に、勇払地区は今後に向けて大きな可能性を持っ

ていると思っております。以上のような理由から、勇払地区に小中学校は残すべきであり、児童生徒数、今後の施設の改修計画を考慮すると、義務教育学校へ移行することは妥当な考えかと思えます。説明にもありましたが、少人数学校であるという懸念を保護者が考えるのは当然かと思えますので、指導方法などさまざまな特色を持って、少しでも不安を解消して理解を得ていく必要があるかと思っております。以上です。
(岩倉市長) ひととおりご意見を伺いましたが、事務局の案に、概ね、そういう方向でいいのではないかというお考えが示されたかと思えます。勇払の方は、地元愛が非常に強い方が多いので、そういう中で、我々としては、勇払、植苗、そして樽前といった地域の教育をどうしていくかというのは、非常に重要な問題でもあります。これを機に、義務教育学校へ向けた具体的な検討を始めるということによろしいでしょうか。
(福原教育長) 1点要望を言ってよろしいでしょうか。学校もひとつの公共施設であり、校舎を仮に新設するにあたっては、地域の防災拠点の役割として、学校は当然避難所になります。また議会での議論にもあります津波避難機能も、勇払地区では、今、必要と考えた時に、防災対策を考慮した施設とすることはできないか、加えて、脱炭素先行地域でもありますので、環境対策に配慮した施設にできないか、将来的に地域の少子化が進んで、規模適正化による適正配置の検討が必要になった場合でも、防災拠点を備えた公共施設として維持・活用ができるのではないかという考えもございます。そういった考えをもって今後進めていただければと思います。
(岩倉市長) そうですね。昨年、苫小牧が脱炭素先行地域に選定を受け、これは、環境省の案件ですが、これから民間でいろいろな動きがでてきますが、そのことに対する、そのことで生まれた益金を勇払地区の振興に使っていこうという流れで、今、動いていますので、そのことも含めて、考えてみたいと思っております。防災機能については、当然、そのような機能を持たなければならないと思いますが、一方でタワーの問題があります。これが納得するのでしょうか。
(福原教育長) そうですね。これをもって結論にはならないかと思いますが、今、

勇払公民館の屋上というのも危機管理側から聞こえていますが、複数あってもいいのかという気はいたします。
(岩倉市長) その他ご意見はございませんか。特になければ、具体的な検討に入るということでよろしいでしょうか。
(一同「はい」の声)
(2) とまこまい型部活動地域移行ビジョン(案)について
(岩倉市長) 「とまこまい型部活動地域移行ビジョン(案)について」について事務局から説明をお願いします。
(教育部東峰参事) それでは、苫小牧型部活動地域移行ビジョンについて、ご説明いたします。はじめに、部活動地域移行の目指すところをお伝えするにあたり、一昨年12月に、市内の中学校生徒、小学校5・6年生児童及びその保護者、中学校・小学校の教職員を対象に実施した部活動アンケート調査の結果からうかがえる、実態・お願い等についてお話しいたします。中学生の活動実態についてですが、学校部活動と地域SC・文化C・少年団等に参加している生徒は、およそ8割を占めています。小学校高学年児童についてですが、進学後は学校部活動の他、地域SC・文化C・少年団等を含めるとおよそ7割の児童が課外活動を希望しています。部活動の地域移行に対する児童生徒・保護者の願いは、専門的な指導者の下での活動を通して、技術の向上を図りたい、図ってほしい、教員の働き方改革につなげてほしい、これらが上位を占めています。次は、教職員についてです。部活動指導が、とても負担、どちらかと言えば負担、と回答した中学校教員の割合は7割強となっております。プライベートの時間がとれない、指導するうえでその競技、活動の専門知識がなく、指導力不足を痛感しているなど、様々な悩みを抱えながら、指導にあたっている現状にあるようです。地域移行に伴い、7割の教員が、全く、もしくは、どちらかといえば指導にかかわり

たかないと回答しており、今後の関与については消極的な姿勢がうかがえます。その一方で、積極的に指導に関わりたいと思っている教員も少なからずいることから、地域移行後も指導に従事できる体制整備が必要です。ここまでのアンケート結果から、現在本市の多くの中学生が、学校部活動・地域ＳＣ・文化クラブに所属し活動をしているほか、中学校進学を控える小学校高学年の児童も加入を検討している現状です。しかしながら、生徒数の減少等により、廃部・休部を余儀なくされる部活動も少なくなく、本当はやりたいけれど、できない生徒がいるのも、また事実です。一方、部活動を担当する教員の多くが、負担や悩みを抱えながら指導にあたっていることから、こうした教員の負担を軽減し、本来業務に力を注ぐことができる環境を整えることも、喫緊の課題ともなっております。 これらの課題を解決しながら子どもたちの充実した活動を生み出す鍵となりうるのが、部活動地域移行です。地域の多様かつ専門的な教育力・環境を生かしながら、子どもたちの活動機会の保障と教員の働き方改革を一体的に推進する、それが、部活動地域移行のねらいとなります。苫小牧市は、全国初のスポーツ都市宣言の街であり、スポーツを愛し、スポーツを通して、健康で、たくましい心と体をつくり、市民の誰もが、体力・年齢・技術・興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでも、生涯にわたってスポーツに親しむ市民をはぐくむことを謳っております。中学校部活動の地域移行により、学校部活動にとらわれない、社会教育・生涯スポーツによる幼児・学童期からの継続・一貫した活動を実現することは、子どもたち一人一人の可能性を伸ばすことはもちろん、本市が掲げたスポーツ都市宣言の理念の具現化にもつながるものと考えます。それでは、地域移行の具体についてご説明いたします。まず、地域移行の将来像についてです。地域移行は、令和 10 年度を目途に完了させたいと考えております。令和 10 年度以降の目指す姿としては、学校部活動としての子どもたちへの指導及び活動が完全に学校から離れ、地域に委ねられている状態です。現有の単一スポーツクラブの他、後ほど説明いたしますが、拠点校部活動によるチーム編成の発展型や小中一貫型としてクラブ化を図るもの。また、文化系部活動では、市の文化系

サークルや市民講座等との連携・協力による活動が考えられますし、また今年度より
本格導入・実施されておりますコミュニティ・スクールにおいて、地域の伝統芸能や
文化を体験する活動等も期待されます。その将来像に向けて、次年度からの４年間で
過渡期①と②に分け、踏むべき段階として次のように設定いたします。まずは、令和
６年度です。地域スポーツクラブ・団体等への移行初期段階として、個人競技種目に
おける完全地域移行、球技種目の拠点校部活動導入によるチームの統合、そしてその
他競技の地域移行準備を進める段階です。
これまで、日常的な指導は地域クラブが行い、中体連大会のみ引率・応援を教員が担
っていた個人競技における部活動については、そのすべてを地域クラブに移行します。
球技種目については、単独チームとして大会に出場できない場合、選手の登録人数や
近隣校であること等を考慮しながら、合同チームを編成して活動してきました。今後
は、地域クラブへの移行を見据え、令和６年度の新人戦以降、市内東部・中部・西部
のブロック毎で拠点校部活動の導入によるチームの統合・再編を進め、持続可能なチ
ームの母体を創り上げていくことになります。拠点校チームは従来の合同チームと違
い、在籍校にその種目の部活動がなくても拠点校チームに入部し活動することができ
ます。また、指導は拠点校チームの指導者に委ねることができるため、入部した生徒
の在籍校の教員が練習や大会に同行する必要はありません。拠点校チームの拠点とな
る学校は、生徒数、生徒の移動距離や手段、指導者の有無などを考慮し決定します。
また、拠点校チームは中体連大会の出場規定や今後の地域クラブ化などを鑑み、一度
編成した後はその先も継続します。実際の活動イメージです。所属生徒数の関係上、
バスケットボールは学校単位の単独チームでの活動が主体となりますが、野球・バレ
ーボール・サッカーは、拠点校部活動、学校単位の単独チーム、地域クラブが共存す
る形での活動スタートを想定しています。拠点校部活動におけるチームの指導につい
てですが、指導者は教員と専門的指導者、部活動指導員等の併置となります。また、
生徒が所属する各学校への連絡等、事務的な業務につきましては、各学校より連絡員
を選出し、令和６年度いっぱい、業務を担っていただきます。球技の他、単一校で活

動している市内 2 校の陸上部については拠点校部活動導入を視野に入れます。また、
現在合同 5 チームで活動している I H 部については、競技人口及びポジションの専門
性の観点から、拠点校部活動導入は難しいため、将来的な地域クラブへの移行を見据
え、当面は現行の体制を維持するのが妥当と考えます。まずは部活動指導員等による
休日指導を実現し、順次、平日の指導・大会の引率指導、さらには、地域クラブ化へ
の検討・協議を進めてまいります。卓球・バドミントン・ソフトテニス・ソフトボー
ル・吹奏楽については、拠点校部活動導入を視野に、地域受け皿の模索と依頼を進め
ながら、協議・検討を重ねていきます。したがって、令和 6 年度につきましては、引
き続き学校部活動として、各校にて運営・指導にあたることとなります。ここまでの、
過渡期①の期間となります。続いて、過渡期②の段階、令和 7 年度から 9 年度につい
てです。この 3 年間では、地域移行成熟期として、個人競技種目の完全地域移行、球
技種目の拠点校部活動による活動の充実と運営の軌道化を実現し、その他競技の地域
移行を進めていきます。まず、個人競技種目については、地域クラブ・団体における
活動及び、運営の軌道化を図るとともに、生徒の競技選択の他、競技普及に向けた裾
野拡大に向けて、新規の団体、地域クラブへの協力依頼を継続していきます。卓球・
バドミントン・ソフトテニス・ソフトボール・吹奏楽については、令和 7 年度より拠
点校部活動の導入及び、地域団体、地域クラブへの移行を開始します。卓球において
は、現有の地域クラブの枠組みが中体連出場規定と合致していないため、現状として
まずは拠点校部活動を導入し、その後地域クラブ化への移行を目指します。ソフト
ボールは現在、市内に 1 チームのみではありますが、活動を希望する生徒が一定程度
いることから、教員や地域の競技団体も含めて早急に指導者を確保し、地域クラブ化
を目指します。美術や書道、パソコンなどの文化系部活動については、地域団体の受
け皿や指導者の確保が難しいため、拠点校部活動導入も含め、単体での活動維持は難
しい現状にあります。そこで、多様な活動体験ができる複合的な地域クラブを創設し、
生徒の興味・関心に基づき、主体的活動できる場・機会を保障します。このクラブに
つきましては、改めて説明いたします。野球・サッカー・バスケットボール・バレー

ボールにおいては、拠点校チームの地域クラブ化や新規クラブチームの参入、少年団
チームとの統合などにより、完全地域化への動きを加速させていくこととなります。
この間のチームの指導についてですが、3 年間で専門的指導者の完全配置を目指す
とともに、指導者確保の視点から、これまでの部活動指導や自身の競技経験を活かして
指導を希望する教員には、兼職兼業システムにより専門的指導者として指導を依頼し
ます。また、生徒が所属する各学校への連絡等、令和 6 年度まで各校担当教員が担っ
てきた事務的な業務につきましては、各チームで後援会を組織することで、保護者へ
と移行します。学校部活動から拠点校部活動、地域クラブ活動への移行過程において、
一番の懸念事項は、指導者と財源の継続的かつ安定的な確保です。クラブ間格差が生
じ、クラブ運営に支障をきたすことなく、長きにわたって子どもたちの活動の場・機
会を維持できるよう、中学校の部活動の受け皿となる全ての地域クラブの運営母体と
して、令和 10 年度を目途に、とまこまい地域総合クラブを設立し、クラブと協議両
面において運営のサポート体制を整えてまいります。地域移行推進部署等が事務局と
なり、活動資金の捻出をはじめ、運営全般、指導者、環境、財政面の支援を行います。
お手元の資料、とまこまい地域総合クラブ 実施体制（案）をご覧ください。各専門
委員会による現段階の試算ではありますが、令和 10 年度以降のいくつかの運動種
目・文化活動のクラブ数、活動形態をまとめております。11 ページには、今後地域ク
ラブが主導で創設する、芸術・文化クラブを掲載しています。これまで、各学校で設
置していた、美術部、書道部、パソコン部等を統合した総合型文化クラブとして、美
術、書道、パソコン、生け花、茶道、実験・ものづくり、料理、伝統芸能など、子ど
もたちのニーズに応じた多彩な活動の展開を想定しております。部活は学校でやるも
の、部活は先生が教えるものといったこれまでの既成概念を払拭し、その上で、行
政・学校・地域・家庭との連携・協働により、令和の新たな部活動のカタチを創り上
げていく必要があります。四者、それぞれの役割について、まずは行政です。部活動
地域移行推進コーディネーター採用と部活動地域移行推進部署及び運営母体としての
とまこまい地域総合クラブの創設。拠点校チーム後援会発足に向けた準備及び、保護

者説明会の開催など、令和6年度から10年度にかけて、順次進めてまいります。学
校は、拠点校部活動における指導者・連絡員・練習会場等の協力、生徒の活動状況の
把握と精神的サポートを担います。家庭は、これまでの、任せるから支えるへの意識
転換、日常的な支援はもちろんのこと、チーム後援会の組織と運営、大会運営業務の
補助等、担っていただくことになります。最後に地域ですが、各競技団体は、活動希
望生徒の受け入れ体制の拡充、指導者養成研修等の受講促進による指導者の確保など
に努めていただくとともに、地域住民、町内会、企業等におかれましては、指導者の
発掘・派遣、施設の利用や寄付等の支援をいただければと考えています。目指すは、
令和10年度の部活動地域移行の完了です。すべては苫小牧の子どもたちのために、
子どもたちの成長に関わるすべての大人が、地域が、そして苫小牧の街が、一体とな
ってスクラムを組み、地域移行の具現化に向けて前へ、前へと押し進めていきたいと
考えております。以上で説明を終わらせていただきます。
(岩倉市長) ありがとうございます。分かりづらいところもあったかと思いますが、
佐藤委員いかがでしょうか。
(佐藤委員) 今、説明を伺いまして、働き方改革、部活動への期待、部員の意識、
目指す目標などで形が変わっていかねばいけない時期と思うと同時に、新しい教
育の時間になるのではないかと捉えております。ただ、移行期の問題として、部とク
ラブを兼業する先生、両方をする先生の存在がまず考えられます。1割に満たない先
生、教職員の方が携わりたいと、部もクラブも携わりたいということですが、その方
たちの意見とか、目指す活動についてのことがあまり触れられていなかったので、よ
く分からないのですが、私が最近見た記事の中では、新潟市の陸上競技の事例があり、
部活とクラブを掛け持ちする先生の声が取り上げられていました。新潟市の強化事業
の一つとして、陸上競技があり、その先生も陸上競技を担当されていて、ご専門も陸
上とのことでした。クラブで教えていたレベルの児童・生徒が成績を上げるとともに
クラブに入ってきた。それによって、強化事業の効果もそうですが、まずは児童・生
徒が新しい自分を発見する、新しいレベルに行くことに自分が関わっていることを体

験して、将来的なことを考えて仲間と切磋琢磨しながら、しているということはい
ことです。問題としては、財源確保です。誰が負担をするのか、具体的に1回500
円で参加をするのか、月単位で参加をするのか、財源確保で、お金を工面できないと
きは、できなくなるのだろうかということも指摘されておりました。今も財源確保の
ことが出ておりましたので、誰が月額を払うのか、払えなくて、能力のある児童・生
徒がいた時にはどうするのか。本当にさまざまなケースを考えて移行する令和10年
までの4年間ですが、最初の1、2年が大きな動きになるかと思いますが、財源確
保、どこで誰が活動する基を確保するのか、担保するのかということが問題となるの
ではないかと思いました。以上です。
(岩倉市長) ありがとうございます。齋藤委員、お願いいたします。
(齋藤委員) 苫小牧市はさまざまな部活動の種目がある中で、部活動の種目によっ
てクラブチームがあったり、いろいろな学校にチームがある種目もあったり、そうで
はない種目もあったりする中、それを一つの新しい地域ビジョンに当てはめることは
なかなか大変だったかと思います。それでもこのようにやっと概略がまとまって、次
に進める一歩となったのかと思いました。地域移行が始まってから、また現実的に出
てくる問題はたくさんあるかと思います。たとえば、拠点校となって、今までは自分
の学校になかったけど、なかったスポーツに取り組めるお子さんがいれば、今までは、
自分の学校でできていたのに、拠点校まで行かなければならなくなったり、つまり交
通費とか移動の時間がかかってしまうという不安です。また大会でも、拠点校と市民
団体のチームでは、やはり目指すところが違ってくるので、勝負事は勝ち負けではな
いというポリシーの方もいれば、そうではない方もいらっしゃるので、実際に動いて
くると、問題も出てくるかとは思いますが、その時に応じて、皆さんで知恵を出し合
って解決をしていけたらいいのかと思います。私、1点気になることがあるのですが、
先ほど詳しく説明をいただいた芸術文化クラブですが、今まで学校では美術部とかが
多かったかと思うのですが、それをひとまとめにして、拠点校ではなく、1か所だけ
で行うというお話だったかと思います。まずお伺いしてもよろしいでしょうか。今、

苦小牧市の部活動のなかで、スポーツではなくて、美術や書道、そういった文科系のクラブに所属している子供の割合はどのくらいなのでしょう。
(岩倉市長) 事務局、説明をお願いします。
(教育部斎藤次長) ちょっと具体的な人数や割合は、今、押さえていないのですが、各学校に美術の先生がいて、美術部は各学校で単体としてできているので、かなりの人数、かなりの生徒が美術部に入っているという印象はあります。
(斎藤委員) 私も、自分の体感では、思っているよりも美術部に入っているお子さんが多いと思います。それは本当に美術が好きで入っているお子さんもいれば、スポーツは苦手だけど、他にないから美術部に入るというお子さんもいるかと思います。今回このように地域移行をした時に、美術部に入りたかったわけではないからそれでも構わないというお子さんもいらっしゃるかもしれませんが、結局、文科系に入りたけれど、文科系の部活が無いという声を多く聞きます。その受け皿が、今、見たときに、アイビープラザで週1、2回しかない。そうするとスポーツ系の部活をやる方にとってはいい制度になったかと思うのですが、文科系のことをやりたいお子さんにとっては、苦小牧市は東西に広いのに、アイビープラザで週に1、2回集まらなないと活動ができないということになります。美術に限って言えば、絵を描くというのは、1回や2回で完成できるものではないかと思います。どの程度の絵を目指すのかということにもよりますが。それ以外にも美術だけではなく、書道やパソコン、実験、モノづくり、伝統とあまりにも幅広すぎるのではないかと思います。これが小学生であれば、いろいろな経験をしながら、自分の好きなものを見つけていく良い体験になって素晴らしいなと思うのですが、中学生だと幅を広げすぎて、しかも場所は1か所しかない、活動機会も絵を描くにも、週1、2回。1年かけても、美術をやりたいのに、伝統芸能もということで、結局、なかなか難しいのではないかという気が私はしました。
(教育部東峰参事) ここに例としてあげた種目、活動をすべてやるというわけではなく、あくまでも、文科系のクラブを希望する生徒が1年間を通して具体的にどのよ

うな活動をしたいか、子供たちの思いを形にしていきたいという思いがあります。こ
の中から、1年間を通してこれとこれに絞って活動をやっていききたいと計画をして、
我々が講師になる人材をあてがいながら活動を進めていくというイメージでございま
す。スタートとしては、中央にまず1か所というイメージですが、活動する生徒が多
くなってくる現状になりましたら、東部、西部と活動拠点を広げていってもよいのか
と思っております。また、絵の活動につきましても、すべてを毎回そこに集まってや
るというのではなく、一度、先生に教えていただいたら、あとは個々人で制作に取り
組み、またそれを持ち寄るといった活動を考えておりますので、限られた中で全てを
やるというものではなく、時間を有効に使いながら展開をしていきたいと考えており
ます。以上です。
(岩倉市長) 説明の冒頭に、今、部活に入っている子供たちが7割程度という話が
ありましたが、あればスポーツも文科系も両方含めた数字でしょうか。
(教育部斎藤次長) そうです。
(岩倉市長) 少なくとも、文化の中身は把握をしておいたほうがいいかと思いま
す。それでは、岡田委員、お願いします。
(岡田委員) 子供が成長していく、小学校に入学してから学習を通じて成長をして
いくことには、一つには、自分の個性が少しずつ育っていくという面もあるかと思い
ます。12歳、中学生くらいの年齢になると、段々、個性がそれぞれ出てきて、学校
の教科の枠では測れないものが出てくるかと思います。私も、小学生の時、「中学生
になったら、部活をやりたいな」といった気持ちがありました。そのようにそれぞれ
の個性が部活をつうじて、自分でも発展していくという面があります。今までの学校
での部活動は、子供の個人の成長には大事だったと思います。ただ、少子化とか、社
会情勢の変化で、次、どのように考えていくのかということになっているのかと思い
ますが、今後、地域のいろいろな力をお借りして、一緒に子供たちを育てていく、苦
小牧地域総合クラブをつうじて、子供たちのそれぞれの個性、潜在的能力を育ててい
こういうものになっていけば良いかと思います。そういった意味では、今までの学

校の部活動では対応できなかった、さらにきめの細かい新たな試みをつうじて、子供
たちの潜在的な能力を発達できる、そういった地域の力を利用しながら、子供たちを
育てていければいいかと思います。
(岩倉市長) ありがとうございます。高橋委員、お願いします。
(高橋委員) 背景から、部活動が地域に移行することに関しては、非常に納得がい
くのですが、私としては、一つの可能性が膨らむことにもつながるのかなと思います。
今までの部活動の在り方自体、全国的にも同じように考えているように、おそらく、
いろいろな形で様々な変化があるものだと思っております。逆に、私はＩＴ時代がこ
れだけ進んで、コロナ禍もあいまって、世界中から教えてもらえる環境が作られてい
ると思っております。その中で、子供たちが小さな時から、さまざまな考え方と技術、
また触れ合いを経験して、このことを機に動かすことができるのであれば、非常に面
白い考え方が生まれるのかなと期待をしております。懸念していることは何点かあり
ますが、ひとつは、先ほどから出ていますが、この苫小牧地域総合クラブ自体がきち
んと形として成り立つのか、そこに対する人材、またきちんと運営をされているか、
機能させるための監視システムをきちんと作らないと、どうしてもパワーバランスで
力のある方がチームや部活動が優先されてしまうことのないように、またマイノリテ
ィにもきちんと光が当たるようなシステムにしなければならないと思っております。
また、記載がありますとおり、本当に子供たちのため、改めて、本当に子供たちにと
って必要なことは何なのかということ、常に探求していくシステムは今後にも必要に
なっていくのかと思いました。まずはそのことを踏まえたうえで、部活動の地域移行
に関しての考え方自体には非常に賛成をしており、期待をしています。以上です。
(岩倉市長) ありがとうございます。では、最後に教育長、お願いします。
(福原教育長) この部活動の地域移行ですが、文部科学省、スポーツ庁、文化庁が
進めている中で、当初は教職員の働き方改革目的という部分が、批判もあったと記憶
しております。ただ、今は、少子化の中でも、将来にわたり、生徒がスポーツ、文化、
芸術活動に継続して親しむことができる機会の確保を主に国のほうでも説明をしてい

るところです。全国的に進められている取り組みで、私自身、全国、道外・道内の教育長と様々な意見交換をしてきました。自分の受けた感想としては、政令指定都市ですとか、大都市は民間クラブが多く存在しているため移行しやすい環境にあります。
また、学校数が少ない、町村では既に地域を挙げてサポートをしているので、地域移行がスムーズに進められている印象があります。苫小牧市も含まれる人口10万人から30万人程度の都市では、少子化に加えてスポーツクラブが限られていることや、競技団体も高齢化となり手不足による弱体化が課題とされており、本市も一部の種目以外は、同様の状態と考えております。そうしたことから、これまでは令和10年度までのロードマップを示してきました。今回、そのビジョンを示すということは、保護者や競技団体、地域等にとって、理解しやすく、目標をイメージしやすい対応と評価をしております。こういった具体的なものを示しているのは、私の知っている限りでは、他地域より進んでいるという印象を持っています。要望を申し上げますと、今後進めるにあたって、まずは部活動の担当から外れる教員につきましては、不登校やいじめ問題等、学校が抱える諸課題に、当然、対応されるということを期待しております。部活動の関与がなくなって楽になるという印象を持たないでいただきたいと思っています。また、地域移行にあたって、最も重要な要素は、指導者等の人材確保と費用負担です。そのために必要に応じた公費を投入することも必要と考えております。それが保護者負担の理解を得ることにつながると思います。地域移行後も、生徒の学校が関わることから、学校施設、備品等の利活用や、部活動担当を求める教員の関係を継続すること、そして、公費を投入することになれば、その意味合い等を学校サイドにしっかり理解をさせることが必要かと思います。以上です。
(岩倉市長) それぞれからご意見をいただきまして、概ねの方向性についてはいいのではないかと、逆に言うと、今の時代、そうせざるを得ない時代背景があろうかと思えます。何か準備室、担当のところに質問等ありましたら、お願いをしたいと思えます。私から、1点。実際、クラブの運営というのは、なかなかイメージができませんが、クラブのオペレーションについて、担当はどの程度把握をしているのでし

ようか。
(教育部斎藤次長) 実は我々も、実際にクラブの運営について携わった者がいなくて、なかなか見えない部分ではあります。ただ、今、部活動の運営に携わっている先生方に細かく聞き取りをして、こういった形に整理をさせていただきました。先生の中には、NPO法人を立ち上げて、チームを作っている方とかもいますので、そういった方々からも意見を聞きながら、進めております。やはり保護者の負担でクラブを動かしている形になりますので、こんごそれがどうなっていくのか検討をしていかなくてはいけないかと思います。
(岩倉市長) やはり大人の視点ではなく、それぞれの競技に取り組む子供たちの視点で考えていかなければならないと思っています。何とか、こうせざるを得ない方向とはいえ、そういう中でも、しっかりとしたシステムを一日も早く作っていく必要があると思います。他にも、質問などはございませんか。
(国民スポーツ大会準備室長) 以前、私が教育委員会にいた時に、この部活動の地域移行に、若干、携わらせていただきましたので、異動してからも、この地域移行がどのように動いていくのか注目をしておりました。非常に難しい案件であったと思います。私が、当時、イメージをしていたのは、スポーツに限って言いますと、苫小牧ではスポーツ協会、地域の総合型スポーツクラブ、民間のスポーツクラブなどの団体に、各種目、野球やサッカーをクラブに所属させる。また指導者の確保も当然必要なので、指導者もクラブに登録をしてもらおう。子供の活動の場所も今までは学校が拠点になっていましたが、クラブ化によって、移動の時間にかかる負担が非常に大きくなるので、拠点となる学校を指定して、各クラブに登録した指導者を学校に派遣をする、子供の移動少なくするというイメージで考えておりました。母体となるクラブやスポーツ協会などでは、指導者の養成、研修等も担ってもらい、指導者に対する謝金も発生する可能性があるので、そうした会計管理も担っていただいて、指導者の方は、指導に専念をするという、イメージでいくと、上手くいくのではないかと考えておりました。ただ、クラブ化になりますと、今度は、どうしても保護者の負担が大きくなる

と思っています。クラブの運営、選手の登録、指導者の謝金。指導者もおそらく日本
スポーツ協会の公認資格を取らなければいけなくなりますので、それが登録に一人当
たり4万円くらいかかります。そういったものもクラブで負担をするとすると、保護
者の負担が大きくなります。そういった意味では、公費の負担もある程度は必要かと
考えていました。いずれにしても、この地域移行は進めなければいけないと思います
ので、今回示していただいたビジョンは、私の考えていたものと似たようなものかと
思いますので、これを進めていただいて、スポーツを担当する部署としまして、こう
いったスポーツ競技団体とのつながりですとか、スポーツ協会への橋渡しという面で
も、市教委と協力をして、苫小牧版の地域移行の実現に向けて取り組んでいきたいと
思っております。保護者の方の負担が一番のネックになるかと思っておりますので、その辺
をなんとか解消できる方法はないかということと、一番は子供が活動の機会を失うと
いうことがダメなことだと思いますので、何とか活動する機会を確保するという組織、
体制づくりに協力をしていきたいと思っております。
(岩倉市長) それは、今、やれますという宣言でしょうか。他に何かありませんか。
今、発言したのは、市長部局のスポーツ担当になりますが、連携して進めていくこと
が重要かと思っております。人員体制の強化や予算措置も必要になるかと思っております。しっか
りと議論をして、できる限り早く、クラブ運営の方向性を出してほしいと思っております。
競技によって周辺環境が同じであればいいのですが、全く異なるので、それが一番心
配をしております。すぐに完璧なものができなくても、一段一段、階段を上がるよう
に、できるだけ早期に、結構上ったと思えるような道筋を作りたいと思っております。
よろしくをお願いをしたいと思っております。それでは、事務局から他に何かありませんか。
(一同「なし」の声)
3 閉会の宣言・・・14時05分